

つになりにけり、○下略

〔吾妻鏡 二十四〕建保七年正月廿七日戊子、入夜雪降、積二尺餘、今日將軍家○源右大臣爲拜賀御參、鶴岳八幡宮御社參酉刻御出、○中略令入宮寺樓門御之時、右京兆○北條義時、俄有心神御違例事、讓御劔於仲章朝臣、退去給於神宮寺御拜脫之後、令歸小野御亭給、及夜陰神拜事終、漸令退出御之處、當宮別當阿闍梨公曉、窺來于石階之際、取劔奉侵丞相、其後隨兵等雖馳駕于宮中、○武田五郎信光進先登無所覽、敵、或人云、於上宮之砌、別當公曉討父敵之由、被名謁云云、就之各襲到于件雪下本坊、彼門弟惡僧等籠于其內相戰處、○下略

〔増鏡 新島もり〕こ左衛門督○源頼家の子にて、公曉といふ大とこあり、おやのうたれにしことを、いかでかやすき心あらむ、いかならん時かとのみ思ひわたるに、この内大臣○源實朝、又右大臣にあがりて、大饗などめづらしく、あづまにてをこなふ、京より尊者をはじめ、かんだちめ、殿上人おほくとぶらひいましけり、さてかまくらにうつしたてまつれる八幡の御やしるに、玄んはいにまうづる、いとかめしきひ、きなれば、國々のぶしは、さらにもいはす、みやこの人々もこせうしけり、たちさはぎの、しるもの、見る人もおほかる中に、かの大とこ○公曉、うちまぎれて、女のまねをして、玄ろきうす衣ひきをり、おとゞの車よりおる、ほどを、さしのぞくやうにぞ見えける、あやまたずくびをうちおとしぬ、その程のどよみいみじき思ひやりぬべし、かくいふは、承久元年正月廿七日なり、

〔參考 太平記 一〕資朝俊基被捕下、向關東附御告文事

又家○島津家、今川、○金勝院本、云、元徳二年、四月朔日ノ事ゾカシ、中原章房清水寺ニ參詣シテ下向セシニ、西ノ大門ニテ八幡ヲ伏拜ケル時、折節小雨打灑ケルニ、蓑笠ニハ、マキシタル者一人、後ヲ過ルト見ヘシ、此旅人太刀ヲ拔、アヤマタズ章房ガ首ヲ打落シテ、太刀ヲ小脇ニ挾テ、坂ヲ下リニ逃ケレバ、下